2006年8月10日発行（毎月1回10日発行）●SJ401号
Monthly The Safety Japan
Sj
人とクルマのいい関係をめざして

8
2006 AUGUST
●編集室：〒107-8556 東京都港区南青山2−1−1
本田技研工業株式会社
安全運転普及本部内
電話 03(5412)1736
●編集人：河野光彦
●年間購読料：1200円（定価1部100円・消費税込）
※郵便振替　口座番号：00170-7-173273
※加入者名：㈱アストクリエイティブ
安全運転普及本部係

今月のスポット

高齢者の知恵と経験を活かして、思いやりを持った子どもを育てる、そうすれば今よりもっと、交通事故は減っていくでしょう。（特集より）

CONTENTS

シリーズ：現場最前線〜生活道路の交通事故削減に向けて ……❶
第3回「生活道路の高齢歩行者事故」
高齢歩行者への交通安全教育の現場から
高齢者自らが学んだことを地域に伝えていく教育
TRAFFIC ADVICE ……❹
●㈱セルート／バイク便ライダーとして必要なセーフティマインドを育てる
SAFETY REPO ……❹
●ホンダテクニカルカレッジ関東／卒業後、就職先で安全運転普及活動ができる人材を育てる
NEWS REVIEW ……❹
●後部座席シートベルト着用促進イベント
TOPICS ……❹
❶ホンダ輸送グループ安全協議会／交通安全標語・ポスター表彰式
❷交通リスクマネジメントセミナー
●活動短信／交通教育センター7月
OPINION ……❺
●水戸部一孝／高齢歩行者の事故は接近するクルマが視野に入らないために起きる
HOW TO LEAD ……❺
●交通教育センターレインボー熊本／第21回高齢者および女性交通安全の集い
DOCUMENT EYE㊱ ……❻
●朝の通勤時間帯に歩行者の側方を通過するクルマを観察する

シリーズ：現場最前線〜生活道路の交通事故削減に向けて　第3回「生活道路の高齢歩行者事故」

高齢歩行者への交通安全教育の現場から

高齢者自らが学んだことを地域に伝えていく教育

三重県鈴鹿市のおおぎ園自治会の住民が立ち上げた「ふれあいサロンおおぎ」主催の交通安全教室

熊本県菊池郡大津町のふれあい型ミニデイサービスの一つとして行われた交通安全教室

内閣府からの委託事業として開催された山形県最上郡金山町の「世代間交流・交通安全教室」での三世代による歩行実施訓練

昨年の歩行中の交通事故死者数2,104人のうち、65歳以上の高齢者は1,372人で、その割合は65.2％（総人口に占める高齢者の比率は21％）に達する。また、自宅から500m以内で事故にあっている歩行者・自転車利用者のうち4分の3以上が高齢者であり、身近な生活圏で多くの高齢者が事故にあっている。とりわけ交通弱者である歩行者としての高齢者への交通安全教育は死者数の削減に向けて、大きな課題である。いま、高齢者に対してどのような交通安全教育が行われているのか。各地域での取り組みを取材し、生活道路での高齢歩行者事故削減への方向性を探る。

7月13日、三重県鈴鹿市のおおぎ園集会所で、高齢者を対象にした交通安全教室が開かれた。おおぎ園とは、鈴鹿市北堀江の中にある住宅団地の総称である。主催したのは昨年10月にできた高齢者を中心に親睦を図る「ふれあいサロンおおぎ」（リーダー・田名瀬多美子さん）。これは、おおぎ園自治会（会長・杉本二三子さん）の住民がボランティアで立ち上げたもので、年に10回ほど活動している。

交通安全教室の開始は午前10時。35名の高齢者が集まっている。指導にあたるのは、鈴鹿市交通教育指導員の中村美穂子さん、鈴木さとみさんの2人である。この日は、交通安全教育プログラム「あやとりぃ[※1]　長寿編」の歩行者教育の部分を使って指導する。鈴鹿市役所生活安全部防災安全課副参事の池上勝生さんが挨拶。その後、参加者一人ひとりが自己紹介し、掲示してある地図の自宅部分に色を塗っていく。自宅探しが完成すると、指導員が「普段、交通事故にあいそうになった場所や、危険だなと思う場所があったら教えてください」と呼びかけた。おおぎ園の地域はクルマがすれ違うことができない細い道が多く、入りくんでいて、見通しの悪い交差点も多い。人通りも多く、すぐ近くに中学校もあるため、中学生が自転車で頻繁に通る。参加者から、信号機のない交差点、川沿いの細い道、道が新しくなって交通量が増えた場所など、計6ヵ所の危険地点が挙がる。それを地図に反映して、おおぎ園地区のヒヤリマップが完成した。

参加者が挙げた危険な場所の中で、一番危ないという声が多かった場所は信号機のない交差点。指導員が事前に撮影した写真を見せる。「この場所は自転車やクルマがすっと出てくるのよ」と参加者から声があがった。

「では、実際に信号機のない交差点ではどのように渡ればいいのでしょうか？①周りを確認せずに渡る。②歩きながら確認して渡る。③止まってから確認して渡る。みなさんは、普段どうしていますか」と指導員が質問する。参加者からは笑いがこぼれる中、①に1人が手を挙げた。多かったのは②。③の止まって確認するという人も数人いた。③と答えた参加者の1人は、「自

※1　あやとりぃ　長寿編＝鈴鹿市とHondaとの協力で設立した鈴鹿モビリティ研究会が開発した高齢の歩行者／自転車利用者向けの交通安全教育プログラム。少人数制で座学と実技を中心に行い、よくある事故事例に合わせた指導内容で構成しているなどの特徴がある。高齢者への重点指導項目としては、道路の「渡るところ」と「渡り方」である。あやとりぃは、「**あ**んぜんを　**や**さしく　**と**きあかし　**り**かいして　**い**ただく」の略。他にも幼児向け「あやとりぃ　ひよこ編」小学生向け「あやとりぃ」等がある。 あやとりぃの詳細は以下ホームページ参照。
http://www.honda.co.jp/safetyinfo/kyt/ayatorii/index.html

高齢者が安全かつ安心して移動できる交通社会をめざす

扇風機の羽根に文字を書いたボードを貼り付けて、動いているものを正確に把握することは難しいことを確認する実験

分は通行中の自転車と接触したことが2回あります。それ以降、中学生の自転車にびっくりすることがあるので、止まってからしっかり確認して、気をつけて渡るようにしています」と発言した。

止まって確認することの大切さを理解する実験

次は、なぜ止まって確認しなければならないのかを理解する実験。1つ目は、参加者の男性1名・女性1名に、文章を歩きながら読むことと、止まって読むことの違いを体験してもらった。歩きながら読むと文章がきれぎれになり、とても読みにくそうにしているため、見ている参加者からは応援の声が飛んだ。実験を体験した竹田美也子さんは、「歩きながら読むのは難しい。人間は1つのことしかできないなと実感しました。最近、自転車やクルマの運転をしながら携帯電話を使用している人や、イヤホンをして音楽を聴きながらの人を見かけますが、危険だなとすごく感じます。止まって、自分の目で確かめることを忘れないようにしたいと思います」と感想を語ってくれた。指導員は「動きながら見ると、距離感がわからなかったり、気が散ってしまいます。この実験から止まって見る方が集中できることがわかりましたね」と実験の結果をまとめた。

日頃自分がどのように横断歩道を渡っているのかを振り返った

2つ目は、扇風機の羽根にボードを取り付け回転させ、ボードに書かれた絵や文字を当てる実験。1枚目のボードは、扇風機の回転が速いうちは、参加者は何が描かれているのか全くわからない。少しゆっくりにすると、赤い色が見えてきた。回転が完全に止まって初めて、参加者から「トマトとリンゴ」という声があがった。指導員が素早く絵を隠して「さてトマトとリンゴは、いくつずつ描かれていたでしょう」と質問。止まっていた時間が短かったため、正確な数は誰も当てることができない。

2枚目のボードは、先ほどと同様に回っているうちは黒い色しか見えない。ゆっくりにすると、参加者から「おおぎ園って書いてある」と声があがった。扇風機を止めて確認すると、答えは「あおき国」であった。指導員は、「動いているものを見るのは難しい。止まってからよく見るとわかりますね。これで今日なぜ止まってからよく見なければいけないのかわかってもらえたのではないでしょうか」と話し、実験は終了した。

最後に、指導員の鈴木さんが参加者にお礼を兼ねて、今後の期待を語った。「おおぎ園の方々は、近くにある箕田小学校の児童の下校時に、パトロールを率先して取り組んでくださっています。子どもを持つ母親として本当に感謝しています。小学校では、自分の命は自分で守ると教えています。子どもたちが自分たちで自分の安全を守れるように、温かく見守ってください。今日参加いただいたみなさんは、ぜひ今日得た知識、自分の知っていることをみんなに知らせたり、伝えてあげてください。そうした重要な役割の人のことをキーパーソンと呼びますが、ぜひ交通社会のキーパーソンになって、周りの人に交通安全を伝えていってください」。

自分たちの住む地域で危険だと思う場所を地図に反映する高齢者

道路を横断する際には、「止まる・見る・聞く・確かめる」ことが大切であることを最後に確認した

その後、参加者から質問や要望、意見が出された。「踏切は路面が悪く不安定なため、自転車の場合、乗ったまま急いで通行してくださいと教えて良いのでしょうか」という質問には、指導員が「踏切では、自転車から降りて自転車を押して歩くように指導しています。ですから、みなさんも同じように指導してください」と丁寧に答えた。

「ふれあいサロンおおき」の主宰者の一人で、民生児童委員を務める福中怜子さんは、「日頃歩いている地域の危険な場所を挙げたりと、身近な地域の交通安全のお話しだったので、興味を持ってしっかり学ぶことができました。話を一方的に聞くのではなく、私たちが参加する形だったので、実践的でわかりやすかったです。みなさんも、これから安全に気をつけていこうという気持ちになったと思います。また、小学校のお帰りパトロールは、子どもたちが事故にあわないようにしっかりとパトロールし、子どもたちにもアドバイスがしやすくなったのではないでしょうか」と、この日の成果を語った。

指導にあたった中村さんと鈴木さんは、おおぎ園の高齢者の方々は安全に対して意識が高いという。「お帰りパトロールで子どもたちの下校の様子を見ているので、地域を通行する人たちの交通マナーの悪い所も見ているのだと思います。実際、パトロールの会議の時に、交通マナーについての話が出ました。高齢者の方々は、子育てを一通り終えられているので、子どもたちへのアドバイスが上手です。見る目が鋭い。パトロールをしていて、不審者を見かけることの方が多いはずですクルマを見かけることよりも、から、防犯パトロールの時に交通ルールの指導もしていただきたいのです。意識の高い高齢者のみなさんだからこそ、そのパワーを地域のために使ってもらいたいと考えています。高齢者が地域のキーパーソンなのです。今回学んだことを誰かに伝えることが高齢者の方の役割ですということを伝えたかったのです」。2人は口をそろえて、高齢者が地域社会のキーパーソンであると語った。

一人ひとりの高齢者に行きとどく、地域密着の交通安全活動

山形県最上郡金山町では、昨年10月12日、内閣府からの委託事業として「世代間交流・交通安全教室」を開催した。これは高齢者、子ども、その保護者の三世代が一堂に会し、お互いを思いやる気持ちを高めつつ、高齢者の交通安全に対する意識や行動を変えていこうという事業である。事業の実施は、（社）[※2]全国交通安全母の会連合会が山形県および金山町、金山町交通安全母の会（以下、母の会）などの団体と協同しながら行った。

交通安全教室には、金山町内の幼稚園と保育園の園児、その保護者、老人クラブの会員、総勢395人が参加。三世代による歩行実施訓練が行われた。園児と親、または園児と祖父母が手をつないで、実際に町内の道路に設定されたコースを歩く。コース内の交差点や危険箇所には、交通安全専門指導員と母の会の会員が立ち、アドバイスを行った。このような取り組みは今回が初めてではない。金山町では10年前から世代間交流による交通安全教育が始められていた。

金山町役場町民税務課交通安全専門指導員の樋渡純子さんは、町民への交通安全教育の企画、指導を担当して9年目になる。金山町では10年ほど前から、母の会と連携しながら、町内の幼稚園と保育園が合同で年に1回、園児だけでなく、親や祖父母にも参加してもらう交通安全教室を行ってきたという。「私たちが子どもたちに指導できる時間はわずかなので、家庭の中で交通安全教育をできるようにすれば、より効果的だと考えたのです。そこで、三世代で実際の道路を歩きながら、親や祖父母が子どもに交通安全のルールやマナーを教えるという形式を取り入れてきました。昨年の内閣府からの委託事業も、それまで積み重ねてきたことの延長線上として行うことができました」。高齢者が交通安全活動の一翼をになう仕組みを地道に築いてきたことが、三世代交流のモデル事業につながったようだ。

高齢者自身の交通安全については、金山町は反射材の活用を促進している。4年ほど前に、リストバンド型の反射材を町の全世帯に配布した。しかし、配布したままでアフターケアがなく、使い方がわからない人が多く、普及が進まなかったという。そこで、樋渡さんは老人クラブの交通安全教室の機会に、「反射材は玄関に置いて出かける時に身につけましょう」という呼びかけを続けた。そして、昨年の世代間交流・交通安全教室では、会場の公民館入り口で高齢者にタスキ型の反射材と反射材シールを配布。会場内で実際にタスキをかけ、反射材シールは靴に貼ってもらい、会場の照明をおとして暗い場所で自分の存在をアピールできるという効果を確認した。現在では反射材の認知度も上がり、高齢者を中心に普及が進んでいるという。

「金山町は小さな町なので、不安全行動を起こしやすい高齢者の情報は、すぐに私のところに入ってきます。その方が役場に用事でいらした場合は、声をかけてアドバイスします。また、役場の広報車で巡回している時に、交通安全の上で危ない行動をしている高齢者を見かけたら、クルマを降

※2 （社）全国交通安全母の会連合会＝「交通安全は家庭から」を合言葉に、交通事故から子どもや高齢者を守るために、母親の立場から、生涯にわたる交通安全啓発活動を推進。基盤をなしているのは全国各地の交通安全母の会（会員数約450万人）で、行政、警察、関係団体等と連携しながら、地域の交通安全活動の一翼を担って、活発に活動している。

「世代間交流・交通安全教室」では歩行実施訓練の後、集合した公民館で高齢者が実際に反射材を身につけて効果を確認した

シリーズ：現場最前線～生活道路の交通事故削減に向けて

第3回「生活道路の高齢歩行者事故」

りて指導をするようにしています。この時に大切なのは、注意されているという印象を与えないこと。何気ない会話の中で、なぜ危険なのかを理解してもらえるようにしています」。交通安全教室のようにイベント的なものだけでなく、高齢者一人ひとりの行動特性に合った具体的な指導が必要だと、樋渡さんは考え、実践している。

金山町の高齢者への交通安全活動の核となっているのが母の会である。母の会では、毎年6月に金山町の独居老人世帯訪問を実施している。会長の松田美喜子さんによると、この取り組みは一人暮らしの高齢者がなかなか交通安全教室に参加してこないためだという。世帯訪問は午後6時から8時まで、25名の会員が手分けをして、町内の独居老人世帯（全100世帯）を訪問し、反射材とこの時期に地元で収穫されたサクランボを配る。「サクランボは、『しっかり止まって！はっきり確認！』と書かれた交通安全メッセージと一緒に私たちが袋詰めしています。訪問した時は、『暗くなったら、なるべく外出しないように。外出する場合は反射材を身につけてください』とアドバイスします。市街地以外は日が暮れると、真っ暗になりますから、反射材を身に付けていないと、クルマから歩行者は発見されにくいのです。反射材は、その場で身につけていただいています。一度でも身につける、貼るという経験から、習慣につながっていくと思います」。反射材を配るだけでなく、その場で身につけてもらい、アドバイスすることで効果をあげている。また、一人暮らしでもなく、老人クラブの交通安全教室にも参加しない高齢者は交通安全についての情報を得る機会がない。このような高齢者をカバーするため、日がおちるのが早くなる10月から11月にかけて重点

独居老人世帯訪問では金山町交通安全母の会の会員が反射材とサクランボを配っている

地域を1ヵ所決め、その地域内で高齢者のいる世帯（昨年は70世帯）を母の会の会員が訪問し、反射材を配布するという活動も行っている。重点地域は毎年変えて継続しているという。地域に密着して、個々の高齢者に対応している母の会の活動が、金山町方式とでもいうべき実践的な交通安全活動を支えている。

高齢者福祉活動を通じた地域での交通安全教育

地域を基盤に高齢者への交通安全教育を全県的に進めているのが埼玉県である。埼玉県警察本部交通部交通企画課、埼玉県知事部局交通安全課、同長寿社会政策課の三課が連携協力して、「老人福祉センター等交通安全アドバイス制度」を実施している。これは地域につくられている老人福祉センターなどの施設職員が、施設を訪れた高齢者に交通安全の啓発活動を行うというもので、具体的には交差点の横断や反射材の活用、自転車の乗り方などをアドバイスする。現在109施設で講習会、声かけ、ビデオ放映などを通じてアドバイスを行っている。アドバイス制度の高齢者講習に活躍しているのが、埼玉県警察本部交通部交通企画課・交通安全教育「ふれあい班」や、2003年に埼玉県知事部局交通安全課のもとに結成されたボランティアの「交通安全まなび隊」（88名）。この2つが各施設に出張して交通安全教育を行う。7月14日には、県内の老人福祉センターの職員を対象にした老人福祉センター等交通安全アドバイス制度講習会が実施された。「交通安全まなび隊」の実演が発表され、埼玉県警察本部が施設職員に高齢者への交通安全教育のポイントを紹介した。

埼玉県は年間の交通事故死者数300人以下を目標に交通安全対策に取り組んでいる。高齢者事故の減少が重点目標だ。埼玉県警察本部交通企画課交通安全対策推進室補佐・熊谷嘉弘さんはアドバイス制度について、「免許を持っていない高齢者、交通安全教育を受けたことのない高齢者に事故が多いのです。しかし、高齢者が交通安全の講習会などに参加していただくのは簡単には

7月14日の老人福祉センター等交通安全アドバイス制度講習会では、ボランティアで交通安全教育を行う「交通安全まなび隊」が実演を行った

いかないので、こうした地域の老人福祉センターなど福祉施設を訪れる高齢者が気軽に参加できるような制度によって、少しでも交通安全活動の底辺を広げていきたいと考えています」と語る。熊谷さんによると、この制度が始まった2001年10月から今年5月末までで、老人福祉センターなどで実施された交通安全アドバイスは3076回、15万3749人の高齢者が参加している。身近な地域での高齢者への交通安全活動が着実に広がってきている。

同じく、高齢者福祉の視点から交通安全活動を行っているのが熊本県菊池郡大津町だ。高齢者を対象にした大津町ふれあい型ミニデイサービスの1つとして、町内23地区のうち18地区で交通安全教室（講話）を年1回開催している。18地区の1つ楽善地区の交通安全教室は7月11日午前10時30分から楽善集会所で行われ、高齢者14人が参加した。講話を行うのは、大津地区交通安全協会事務局長の坂本ルイ子さんだ。坂本さんは大津警察署管内の幼稚園、小・中学校、高等学校、企業などで、年間240回以上も交通安全指導にあたっている。大津町では12年ほど前に、散歩中の高齢者とクルマの交通死亡事故が立て続けに起きた時に、交通安全指導を専門に行う職種を設け、小学校の校長を退職したばかりの坂本さんが担当することになったそうだ。

講話はまず、大津警察署管内での死亡事故の事例を紹介する。今年はすでに昨年と同じ4人（7月11日現在）が亡くなってい

て、そのうちの1人が80歳代の自転車に乗った高齢者だという。「横断歩道を渡ろうとしたら赤信号だったので、そこで待たずに横断歩道から少し進んだ場所で横断し、トラックとの事故にあいました。青信号になってから横断歩道を渡れば、事故にあうことはなかったでしょう」。

安全確認の基本は『止まって、見る』だが、『見る』ではダメで、『観る』『観察する』でなくてはいけないと強調する。「クルマは来ていないだろうか、と頭の中で自分に言い聞かせながら『観る』。人間は誰かを待たせていたりすると、そちらに気がいってしまうから、心を向けない『見る』になってしまう」。目は向いていても、見えていない、対象を認知していないことで事故につながるケースは少なくない。坂本さんは、高齢者が周囲に意識を向けてもらうためには、具体的な行動として示さないといけないという。例えば、信号機のない場所で横断する時は、「時間をかけて、目に入ったものが何なのかというところまで確認する」。信号機のある場所では、「時間をかけられないので、『クルマが来ていないか』唱えながら、横断するようにアドバイスします」という。

続いて、今年の熊本県の交通安全運動スローガン『高齢者　あなたのマナーで防ぐ事故』について説明する。「今の若い世代は、自分が先に行くことしか考えていないので、思いやりのない人が多い。スローガンは、マナーを知っていて、思いやりを持っている高齢者は高齢者です。ということを意味しています。だから、高齢者は若い世代にマナーを教えていかなければいけません。高齢者の知恵と経験を活かして、思いやりを持った子どもを育てる、そうすれば今よりもっと、交通事故は減っていくでしょう」。

講話が終わると、坂本さんはペンダント型の黄色い反射材を参加者に配った。「先端には虫眼鏡がついていますので、普段から首にぶらさげておけば、字が小さくて読めない時に便利です。そして、夜は全体が光るので『見せる』という意味では効果的です」と説明。受講した古田ワサヨさんは以前、夕方、坂道を下ってきた中学生の自転車と接触したことがあったそうだ。「自転車の中学生は、私が黒っぽい服で道路の端を歩いていたので、気づかなかったのだと思います。これから、夕方に外出する時は今日いただいた反射材を身につけるなどして目立つようにしたいと思います」と、早速、反射材を首にかけていた。

坂本さんは交通事故の原因は、一人ひとりの心の問題だと考え、「礼儀作法、人への思いやりを持っている高齢者が、子どもや孫に心のありようを伝えるリーダーになってほしい」と願っている。「次の世代の子どもたちの心を育てることが、高齢者の役割なのです。それによって高齢者自身も成長できると思います」と、高齢者に期待する。

今後、高齢化がさらに急速に進む中で、高齢者が地域社会の一員として社会参加し、元気に暮らしていくためには、日常の生活圏を安全かつ安心して移動できる交通社会をつくっていくことが不可欠である。鈴鹿市のおおぎ園自治会をはじめとして、高齢者が自分自身のこととして交通安全活動に参加し、それを地域で支えていく各地での取り組みに、これからの交通社会がめざす方向が示唆されているようだ。

「高齢者は若い世代にマナーを教えていかなければいけない」という大津地区交通安全協会の坂本さん

坂本さんが配ったペンダント型の反射材を身につける高齢者